

灯台のそばには いつも人がいる

灯台が無い頃の尻屋

「海の難所に暮らす人々」

尻屋沖は、古くから「海の難所」や「難破岬」と恐れられてきた。海中には硬い岩々が点在し、濃い霧と荒波が行く手を阻み、多くの船が座礁した記録が残る。

一方で、尻屋の人々は、アワビ等の海産物を採り漁で暮らしを支えてきた。尻屋沖は、命を育む恵みであると同時に、命を脅かす厳しい存在であった。

江戸時代の旅人は、尻屋の人々について次のように旅行記に残している。(東通村史歴史編Ⅰから要約) 焼飯を子に与えた礼にと、盆いっぱいのアワビを御馳走になった。尻屋へ向かう途中まで見送ってくれお礼も受け取らず、別れ難いと涙を流した。

訪れる人を温かく迎える気風は、今も変わらず受け継いでいる。『灯台ワールドサミット』では、地元の方たちが、アワビのフライをのせたカレーを振る舞い、遠方からの来場者を迎えた。

灯台がない時代も今も、尻屋の人々は、海とともに生き、もてなしの心を受け継いでいる。



アワビのフライは、
尻屋の家庭料理！
アワビに衣を付けて、
まるごと揚げる。

灯台の誕生

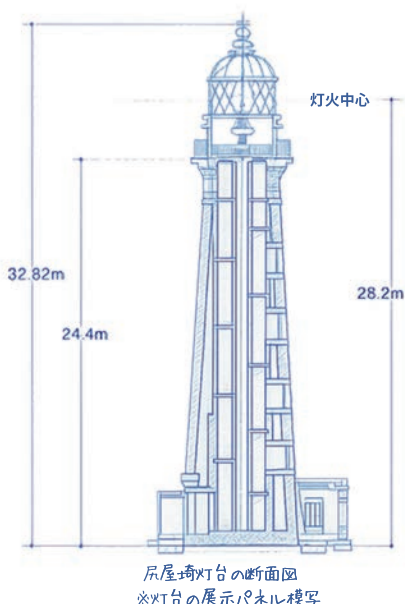
「斗南藩士たちの願い」

明治維新後、斗南藩は、貧しさに耐えながら下北の開拓に力を尽くした。藩は、この地の発展には海の難所・尻屋沖の海上安全が欠かせないと考え、明治4年6月、明治政府へ尻屋崎への洋式灯台建設を請願した。

その願いが国を動かし、建設工事が始まる。当時は洋式灯台を設計する技術がなく、政府は灯台技師に、R・H・ブランドン氏を英国から招いた。ブランドン氏は、全国各地の洋式灯台を手掛け「日本の灯台の父」と称される。

約3年4か月を経て、明治9年10月20日に、尻屋埼灯台は初点灯を迎えた。船舶に灯台の位置を知らせる霧鐘や霧笛が日本で初めて設置されるなど、その時代の最先端技術を取り入れながら、尻屋沖は、近代化の歩みをすすめる、海の安全を支えてきた。

こうした歴史的・技術的価値が認められ、令和4年12月、国の重要文化財に指定された。



灯台とともに暮らす

「戦時下、そして戦後の今」

第二次世界大戦、戦災を忘れない。終戦の一月前、尻屋埼灯台の上空を戦闘機が飛来した。北の海上安全を支える重要な役目だった灯台が標的となった。沖の船や灯台周辺は激しい攻撃を受けた。灯台の在中職員一名の尊い命も失われ、灯火機能が消失した。

しかし、灯りが消えていたはずの灯台に、不思議な光がともる様子を複数の灯台職員が目撃したという。この出来事は「怪火(あやしび)」の伝説として、今も語り継がれている。

終戦後、灯台は復興を遂げ、今、平和な世界を照らしている。漁協で働く榎谷さんは、灯台との思い出は、二十歳くらいの頃、結婚記念の写真を、妻と二人で尻屋埼灯台の前で撮影したことだと教えてくれた。「その時の写真が、今も写真屋に飾られています。」と笑顔を見せる。二児にも恵まれ、灯台のように明るい家庭の大黒柱だ。夜明け前から浜で働く日もある。夜明け前、榎谷さんを照らすのは、150年もの間、この地に立ち続けてきた尻屋埼灯台の灯りだ。



榎谷 博之 さん
尻屋出身・34歳